

どのように描き分けられるのかを意図的に整理することによる議論の深化が期待される。

本書は2007年に刊行された『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』（海青社）に続いて、日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループによる共同研究から生まれた成果である。1999年度に開始された近代日本の地域形成研究グループの共同研究は、1994年度に始まった近代日本の地理学談話会から発展したものであり、2001～2004年度に日本学術振興会科学研究費補助金（近代日本における国土空間・社会空間の編成過程に関する歴史地理学的研究、基盤研究（A）（1））、2003年～2006年度に（近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究、基盤研究（B））などの交付を受けながら、着実にその成果を实らせてきた。作成された報告書および学会における合評会、シンポジウム開催などによって、当該研究グループから発せられる「近代とは何か」、「なぜ近代日本の地域形成なのか」、「近代日本を如何に描くか」という問いから多くの刺激を受け、新たな研究展望を見出すきっかけを得たのは私だけではないはずである。

地域の地誌的情報を伝える手段として、測量に基づいて記号化、抽象化された近代地図の味気なさは対照的に、絵師の世界観や作成意図などの「任意表現（117p）」が許容された絵地図や古写真の世界からは当時における人々の視覚的経験の豊かさを読み解くことができる。本書が提示したこのような視点を地理学における意義として問うならば、近代という時代に着目した独自性とは別に、「抽象的・物理的空間としての空疎化されてしまった地域に、内実を取り戻し、主体にとっての意味のある「場所」として見つめ直そうとする人間主義的アプローチ（矢守1984）」にも広く通ずるところがあるように思われる。

（湯澤規子）

文 献

織田武雄（1943）：『地図の歴史』講談社。
矢守一彦（1984）：『古地図と風景』筑摩書房。

ダグラス・ボッティング著（西川 治・前田伸人訳）：『フンボルトー地球学の開祖ー』東洋書林。2008年10月刊、410p.+62p., 4,800円（税別）

本書は、1973年に刊行された Humboldt and the Cosmos の日本語訳である。刊行当時から、フンボルトに関心をもつ人々に注目され、愛読していた日本人も数多かった名著といえる。遅ればせながらではあるが、フンボルトを知る最良の手引き書が、没後150周年にあたる2009年を目前にして日本語訳されたことを喜ぶたい。

一般読者を想定したフンボルトの伝記としては、これまでにガスカール『探検博物学者フンボルト』（白水社、1989年）がある。これに本書が加わったことで、多彩な側面をもつ知の巨人フンボルトが、日本の読者にとっても包括的かつ容易にアプローチできる存在になった。2つの本を比べると、ボッティングのそれは原著出版年が古いものの（あるいは古いゆえに）、多面的で詳細な伝記的事実を知らせてくれる。読者が最初にとるべきスタンダードな入門書といえる。このことは、原著の出版が広く世界的に歓迎され、すでにドイツ語訳（1974年）やフランス語訳（1988年）があること（訳者によればスペイン語訳もあるそうである〔評者未見〕）でも明らかであろう。

さらに本書は、詳細である反面、とかく無味乾燥になりがちな伝記の弊をまぬかれている。出生から幼年、青春、壮年、老年、死去と、90年の長きにわたる生涯を描きながら、単調におちいることなく生彩な記述に満ちている。これは、フンボ

ルトという多面的な素材に対して、ボッティングが施したメリハリの利いた選択によるものであろう。本書の中心は、1799年6月から1804年8月まで、5年2か月におよんだ南北アメリカ旅行で、なかでもベネズエラ内陸部（オリノコ川流域）の探検旅行（1800年2月から同年6月までの約4か月間）に焦点があてられている。ちなみに、ボッティング自身が探検家であり、フンボルトと同じルートを踏破している。

こうした選択は、本書の構成やページ配分をみれば明らかである。科学的な探検旅行をころろざとして具体的な準備を始めるまでの期間（1章から4章まで）は、あわせても約50ページで全体の7分の1を占めるにすぎない。これに対して、先述の南北アメリカ旅行に関しては、その前後を含めると約180ページ（5章～14章）があてられ、全体の半ば近くを占めている。とくに、オリノコ川探検の記述（9章「リャノス」、10章「大瀑布を越えて」、11章「カシキアーレ水路の秘境地帯」）だけに50ページ以上がさかれており、本書の白眉といえる。また、ヨーロッパに戻ってからのフンボルトについても、旅行でえられた学術的成果の出版に関する記述（15章「パリの著名人」、16章「南アメリカ旅行に関するさまざまな著作」）が詳しい。後年のロシア旅行（19章「シベリア探検」）や代表的著作『コスモス』（20章「コスモス」）は、相対的にみれば簡略な記述ということになる。

ボッティングは、執筆にさいして、フンボルト自身の手になる旅行記録や書簡類を精査し、本文中にしばしば引用している。旅行記録は、アメリカ旅行の学術的成果『新大陸における熱帯諸地域への旅行（全30巻）』の一部をなすもので、その大半がベネズエラ滞在中の記録にあてられている。近年、その抄訳が『新大陸赤道地方紀行（全3巻）』（岩波書店、2001～2003年）として刊行された。その意味では、ベネズエラ旅行について、

フンボルト自身による報告を日本語で読めるわけである。しかし、だからといって本書の価値が失われたとはいえない。フンボルト自身の文章は、一般の読者にとってコンパクトではないからである。親友のアラゴ（フランスの物理学者・天文学者）は、フンボルトの文章について「君は本をどう書いたらよいか、まったくご存知ないようだ。何もかも際限なく書くが、それは本ではない。額縁のない絵のようなものだ」（本書 p.253）と評したそうである。したがって、入り口としては、いまでも本書が最良の手引きであろう。本書を読むことで、フンボルト自身の手になる旅行記録にチャレンジする意欲もわいてこよう。

蛇足ながら、評者もかつて『続地理学の古典－フンボルトの世界－』（古今書院、1997年）のなかで、フンボルトの南北アメリカ旅行について要約を試みたことがある。そのさい、5年2か月にわたった全行程を、滞在期間の長短に対応させて記述する方針をとったため、ベネズエラ旅行に関する記述があっさりしたものとなった。そこで、この「期間については、ガスカールの『探検博物学者フンボルト』を参照して」いただきたいと付記したが、実際に念頭にあったのはボッティングの本書であった。その日本語訳が、こうして現実のものとなり、たいへん喜ばしく感じている。

最後に、本書には訳者二人による充実した解説が付されていることを特記したい。「訳者まえがき」では、フンボルトをより深く知るための手がかりが紹介されており、巻末には「A. フンボルトと日本－幕末から昭和にかけて－」および「A. フンボルトとラテンアメリカ」という2編の論考がおさめられている。また、関連する年譜や人名・事項小事典などもあり、訳者たちの本書に対する思い入れの深さを感じさせる。ドイツ語訳やフランス語訳よりも格段に充実した出来ばえといえよう。

（手塚 章）